博士論文要旨

コミュニティ心理学の視座を活かした
スクールカウンセリングモデルの構築

立命館大学大学院社会学研究科
応用社会学専攻　博士課程後期課程
イイダ カオリ
飯田香織

本研究では、近年重要性が指摘されている「コミュニティ心理学」の視座を活かしたスクールカウンセラー（以下 SC と表記）活動を検討することを目的とした。特に滋賀県において全国で先駆的に行われている複数の SC がリレー方式で学校に常駐する SC 常駐活動の実践研究を通して、学校現場で有効な SC 活動をコミュニティ心理学の枠組みから捉え直すことを本研究の目的とした。

第 1 章では、現在の日本のスクールカウンセリングにおいては、アメリカのナショナルモデルのような統一した SC 活動が示されておらず、SC 個人の力量によって活動に差が生じており、統一された SC 活動がしめえされることが必要であることを明らかにした。

第 2 章では、コミュニティ心理学における「コミュニティ」の定義とコミュニティ心理学の独自性についてまとめた。その結果、コミュニティ心理学における「コミュニティ」は、地理的近接に関わらず、何らかのアイデンティティの意識に基づいて結びついた「機能的コミュニティ」を指すことが明らかになった。さらに、日本では「コミュニティ」は「地域」と訳されることが多く、地理的近接が強くイメージされることも見出された。コミュニティ心理学の独自性についても、先行研究を行い、10 項目の独自性を見出した。さらにコミュニティ心理学の視点を用いて考察された実践研究を分類、検討することによって、コミュニティ心理学に基づく実践の構成要素を示した。

第 3 章では、全国で先駆的に行われている複数の SC がリレー方式で学校に常駐する SC 常駐活動（常駐型と定義）の実践研究を行った。その結果、常駐型の活動においては、Caplan（1961）の言う一次予防（健康な子どもをより健康に、課題が生じる前に課題発生予防的介入を行う）、二次予防（支援の必要な子どもの早期発見、早期支援）、三次予防（課題を有し緊急に対応が必要な子どもへの対応）のうち、一次予防が増えたことが明らかになった。さらに、常駐型 SC として勤務する SC を対象にアンケート調査を行い、常駐型では「システムや環境に働きかける視点」、「予防的活動の重視」、「間接支援（支援者支援・

チーム支援）の重視」、「エビデンスに基づく支援の検討」、「ソーシャルサポートの充実を目指す活動」という独自の視点を持って活動していることを見出した。

第 4 章では、SC 活動をコミュニティ心理学という枠組みから捉え直し、有効な SC 活動について検討した。コミュニティ心理学の視座を活かした SC 活動が可能になる前提条件と、基本理念、実際の SC 活動に分けて検討した。

前提条件は、構造などの物理的側面（ハード面）と関わる人々の意識などの心情・感覚的側面(ソフト面)の両面において必要になる。そして、これらの前提条件が十分に整っていない場合には、これらの条件が整うように活動するところから始める必要がある。

コミュニティ心理学の視座を活かした SC の基本理念として「システムや環境へのアプローチ」、「原因探索的な視点ではなく、支援志向的な視点での活動」、「成長モデルと修理モデに基づく支援」、「予防を重視した活動」、「間接支援（支援者支援）やチームとしての支援を重視した活動」、「エビデンスに基づく活動」、「新しい変化に開かれた支援」、「子どもに対するソーシャルサポートの充実を目指した活動」の 8 項目を見出した。

コミュニティ心理学の視座を活かした SC が行う具体的な SC 活動として以下の活動を見出した。「子どもに対する活動」として SC は、「子どものカウンセリング、不登校の子どもへの支援、心理授業などの心理教育、特別支援に関するアセスメント・プランニング・コンサルテーション・支援システム構築、いじめ事案への対応、心理検査、生徒会との連携、相談室開放、全員面談」を行う。「保護者に対する活動」として SC は、「保護者面談、PTA との連携、親の会などの実施」を行う。「教員に対する活動」として SC は、「教員との協働（コラボレーション）・コンサルテーション、アセスメントとプランニング、養護教諭との協働、ケース会議への参画、教員研修」を行う。「学校コミュニティに対する活動」として SC は、「学校の支援システム構築に関するコンサルテーション、各部会への参画、アンケート結果に基づく活動、SC 通信の発行、緊急支援」を行う。「連携に関する活動」として SC は、「小中連携、関係機関連携、学校保健委員会などへの参加、小学校での活動」を行う。そして、これらの各活動を行う際には、それぞれの活動が持つ一次予防的側面、二次予防的側面、三次予防的側面があること、個人と各コミュニティとのシステマティックな関係性があることなどを明らかにした。

コンサルテーションやコラボレーション、予防の重視、システマティックな関係性の理解などは、コミュニティ心理学の中心概念であり、それらの概念は、多くのスタッフで子ども集団を育てていくという学校現場に大変適合する概念であった。これらの概念を学校現場に導入することで、SC はより幅広い視点を持って、より幅広い活動を行うことができ、有効な活動につながることを見出した。

しかし、本研究は現時点での一考察であり、今後の社会情勢の変化や SC を取り巻く制度的変化なども含めて必要な修正が加えられていくべき性質のものである。今後も SC に求められる役割は変化していくことが考えられる。それらの変化に対しても、新しい変化の意味を見出し、より多くの支援につながる活動を検討していくことも今後の課題としたい。